

## Comenius, J.A. における「楽しさ」の意義（2）

—『汎教育』の陶冶（Cultura）観と陶冶理想に焦点をあてて—

笹 川 啓 一

### はじめに

コメニウス（Jan Amos Comenius, 1592-1670）は現在のチェコ共和国とスロバキア共和国の国境にまたがるモラヴィア地方で生まれ、オランダのアムステルダムにて客死した。生前の彼はプロテスタント教団であるボヘミア同胞教団に属する牧師であり、社会改革者であり、教育思想家であったため、生涯でおよそ二百以上もの様々な書物を執筆している。彼の教育に関する主要な著作としては、ラテン語学習を容易にするために同じ内容をラテン語と他言語を併記した言語教科書である『開かれた言語の扉（Janua Linguarum Reserata, 1631）』、それまで分散していた教育論を秩序立て、体系化した『大教授学（Didactica Magna, 1657<sup>1</sup>）』、世界最初の図入り教科書であると言われる『世界図絵（Orbis sensualium Pictus, 1658）』等が挙げられよう。これらの著作から、コメニウスは「実学教育学者」として紹介されている<sup>2</sup>。上述の著作のうち、『開かれた言語の扉』、『大教授学』は『教授学著作集（Opera Didactica Omnia, 1657）』に収録され、彼の生存中に出版された。『世界図会』についても『教授学著作集』の中に僅かであるが紹介されている。

『教授学著作集』出版後もコメニウスは教育に関する執筆活動を続け、人間の生涯に亘る教育について論じた『汎教育（Pampaedia, 1660）』を書き上げた。彼は、死の直前まで執筆し続けたとされる、彼の思想の集大成ともいえる著作集『人間に関わる事柄の改善についての総審議（De rerum humanarum emendatione consultatio catholica, 1667）（以下「総審議」と略す。）』の第四巻としてこれを位置づけた。『大教授学』においては学校段階を四つに区分した上で教育を論じているのに対して<sup>3</sup>、『汎教育』では更に四つの段階を新たに設けて人の誕生前から死後まで論じている<sup>4</sup>。また、『教授学著作集』に『大教授学』が掲載された後に執筆されたと考えられる記述があるため<sup>5</sup>、コメニウスは『汎教育』を少なくとも『大教授学』が執筆されてから約20年後にも執筆していたといえる。この20年の間に、教育活動にコメニウスは従事した。彼はハンガリーのサロシュ・パタクにおいて校長として学校経営を行い、実践によって得た知見を基に『最新言語教授法（Novissima Linguarum Methodus, 1648）』を執筆している。したがって、『汎教育』は『大教授学』と『最新言語教授法』を統合・補完し、コメニウスの教育思想を完成させる重要な著作であると考えられる。

コメニウスは『汎教育』の冒頭において、この書の目的を次のように述べている。

ここでは、才能の普遍的な陶冶（Cultura）について、すなわち、（中略）個々の「人

間」の精神をさまざまな快楽 (Deliciae) を育む庭園となるように仕向けることについて熟考されています<sup>6</sup>。

ここで彼は教育 (EducoあるいはEducare)ではなく、陶冶 (Cultura) という単語を使用している。また、汎教育の説明の際に「人類全体の普遍的な陶冶です。なぜなら、ギリシア語の『教育』[ $\pi a i \delta \epsilon i a$ ]とは、教育 [Institutio] とか『訓育』[Diciplina]であり、それによって「人間」が啓発される<sup>7</sup>」と述べている。ヴィルマン (Otto Willmann, 1839-1920) は「陶冶についてのわれわれの概念の中に何かギリシアの $\pi a i \delta \epsilon i a$ が生き続けており、それは陶冶を、実際的な興味に限定するような束縛から守っている。<sup>8</sup>」と述べている。学問領域において人間の生活に関係する分野を実学と呼ぶならば、陶冶は実学以外の学問領域をも覆う教育用語であろう。一般に実学教育学者として位置づけられているコメニウスが、教育ではなく「陶冶」を意味する単語を用い、タイトルにも Paedia という単語を使用したことは、彼にとっては何らかの理由があったと考えられる。そこで、本論文ではコメニウスが述べた「楽しさ (Deliciae)」という概念を検討する一助として、『汎教育』の特徴である就学期間を終えた壮年期における陶冶を通じて、彼の人間観を支える陶冶観と陶冶理想について考察したい。

## 第一章 陶冶 (Bildung) とは

本章ではコメニウスの述べている陶冶性を検討する準備として、最初に一般にいわれる陶冶 (Bildung) について確認するとともに、現代における陶冶と教育の違いについて述べる。

篠原は、陶冶 (Bildung) という単語についてナトルプ (Paul Natorp, 1854-1924) を引用したうえで「陶冶なる語は教育活動の如何なる方面にも適応せられる<sup>9</sup>」と述べている。そして、「教育上では第一に、(中略) 内部からの発展であり、第二に内部からの発展であるから生徒の自己活動によって成り、第三に、内部的、精神的本質を全体として (一方に偏しないで) なるべく完全な姿に発展せしめることを意味する。(中略) 要するに、陶冶は作用から見れば自己活動による内部的発展であり、目的としてみれば人の本質の、全體としての完全な形成として、一種美的な色彩を有する概念である。<sup>10</sup>」と述べている。次いで、教育について、第一に、主として意志の教育、及び意志を基礎とする教育を指し、第二に、他よりの助成を意味し、第三に、他よりの助成を要しないまでに発達すると教育は底止し、第四に、教育は教育活動の社会的方面を指示する、と定義している<sup>11</sup>。

以上を比較すると、陶冶は内部からの発展であり、自己の活動を基盤としており、したがって、時間的な制約は自己が活動を終了する死以外に設けられていない。そして、陶冶の目的は調和の取れた人格の完成といえる。それに対して、教育は外部 (他者) からの形成・助成であり、自己と他者との関係を基盤としており、時間的な制約が設けられている。そして、教育の目的は人間の社会化であるといえよう。以上を概観すると、陶冶は教育と比較して制約が少なく、取り扱う領域及び内容は広く深いといえる。

しかし、陶冶と教育は対立するのではない、と篠原は指摘する。教育について篠原は「第五に、教育は教育者の意志によって生徒の意志を導き、文化価値の受容及び発展に対する

正しき態度、傾向を與へる方面を重んじ、陶冶はこの傾向に基づき、文化價值を受容せしめ精神内容を豊富ならしむるを主な目標<sup>12)</sup>する、と定義している。ただし、篠原は「第六、陶冶なる語は「完全な形成」という目的（成果）をも表現し、作用（陶冶する）とその結果の二重の意味を有するが、教育なる語は専ら作用に關し、目的または成果を指すことはない。<sup>13)</sup>」としている。陶冶は教育の上位概念であるが、教育という下位であると同時に核となる概念が必要であるといえよう。そして、教育も意志という限られた領域にのみ作用するので、意志を向ける対象に向かわせる陶冶という概念が不可欠であろう。以上を概観すると、現代において陶冶と教育という各概念は相互に補完しあう関係にあると確認できる。

以上が現代における陶冶（Bildung）の概念であるが、この解釈は、「メーゼル J. Möser やゲーテ以後之を内部的に解し、精神生活を形成する場合にも転用せらるるに至った<sup>14)</sup>」という 18 世紀から 19 世紀にかけて形成された概念である。それ以前は「一定の「かた」Bild になぞらへて事物を形成することを指し、外部的に形を與へる意に用ひられてゐた<sup>15)</sup>」とされる。本研究において考察の対象とする、コメニウスが生きた 16 世紀から 17 世紀にかけての陶冶（Cultura）については後述するが、その前に『汎教育』について次章で概観したい。

## 第二章 『汎教育』の構成について

コメニウスが何年頃から『汎教育』の執筆を開始したのかは現在のところ分らない。しかし『汎教育』が含まれている『総審議』については、『大教授学』脱稿後の 1645 年頃から執筆を開始した、と井ノ口は指摘している<sup>16)</sup>。

『汎教育』以外にも『総審議』には家庭改革、学校改革、社会改革等について論じられた『汎改革（Panorthosia）』等が『汎教育』以外にも六部あるため、コメニウスが何年頃まで『汎教育』を執筆し続けたのかについても正確には分かっていない。ただ、幾つかの箇所が未記入もしくは削除されている点から、晩年、死の直前まで執筆していたと推測できるのみである。『汎教育』は導入と 16 の章によって構成されている。それらは主に以下の四領域に分類できる。

導入： 汎教育とは何か。また何を意図しているのかということを示します。

第 I 章：人間が教えられるための『必要性 可能性 容易さ』を指し示します。

第 II 章：すべての者が（Omnes）

第 III 章：すべての事柄を（Omnia）

第 IV 章：全面的に（Omnino）

『汎教育』執筆の意図と、教育の究極目的がここでは論述されている。また、今日においてコメニウスの名と共に語られる Omnes, Omnia, Omnino がそれぞれの章の題名となっている点から、この領域はコメニウスの教育思想の理論として位置づけられるであろう。次の領域は主に初等教育機関における教育に関係する要素を如何なる目的で設置し、どのように教育機関を充実させるかという問題について取り上げられている。各章の題名は以

下のとおりである。

第 V 章：学校の (Scholarum)

第 VI 章：教科書の (Librorum)

第 VII 章：教師の (Magistrorum)

上述した三章はそれぞれ第 II 章から第 IV 章に順に対応し、それらの理念を実現するための具体的な事物の代表として『汎教育』の中に位置づけられている<sup>17</sup>。そして、第 V 章では第 VIII 章から第 XV 章まで論じられる人間の生涯の各時期を「学校」として位置づけ、それら学校を月と季節に喩えて章のはじめで論じている<sup>18</sup>。それらが以下の第 VIII 章から第 XIV 章に対応している。

第 VIII 章：1. 生まれようとする者の学校 (Schola Geniturae)

第 IX 章：2. 幼児期の学校 (Schola Infantiae)

第 X 章：3. 児童期の学校 (Schola Pueritiae)

第 XI 章：4. 青年期の学校 (Schola Adolescentiae)

第 XII 章：5. 若者期の学校 (Schola Juventutis)

第 XIII 章：6. 壮年期の学校 (Schola Virilitatis)

第 XIV 章：7. 老年期の学校 (Schola Senii)

これらについてコメニウスは「最初の二つの「学校」は私的な学校と呼べましょう。(中略) 中にある三つの「学校」は公の学校と呼べましょう。(中略) 最後の二つの学校は個々人の学校です。<sup>19</sup>」と述べている。そして、最後の二つの学校は、それまでの学校とは異なり、他者に監督されるのではなく「「神」と自分自身とに任されている<sup>20</sup>」としている。これらの章の内容は各期間中の人間の特徴、達すべき目標、カリキュラム等によって構成されている。この他に以下の章が『汎教育』では展開されている。

第 XV 章：8. 死の学校 (Schola Mortis)

第 XVI 章：結論。そのように構成された事柄のとても健全な有用性を明示します。<sup>21</sup>

第 XV 章においてコメニウスは、死は老人だけに適応されるものではないので、「死の学校」についての章が絶対に挿入されるべきであると述べている<sup>22</sup>。「よく死ぬこと [Euthanasia] は「老年期」とは全く異なって<sup>23</sup>」おり、「老人に言われたことは「すべての者」に言われたのです<sup>24</sup>。」として、生涯の如何なる時であっても常に死を意識して生を全うするように述べている。その上で、この章では入れ子構造のように「生誕と死」・「幼児と老人」・「児童と壮年」・「青年と若者」を対応させている。更に「汎知学」で八番目の「永遠」「界」が付け加えられたように、ここでも死という八番目の「学校」が付け加えられるべきでしょう。<sup>25</sup>とし、汎知学と人間の生涯を重ねるかのような記述をしている。

第 XVI 章では結論として導入で述べた意図が達成され、すでに明示した手段によって、

さまざまな才能の持ち主を普く陶冶することが達成できるでしょうと述べ<sup>26</sup>、『汎教育』の目的が達成されたとして完結を宣言している。そして、以下の記述が前述した『汎教育』の冒頭に対応すると考えられる。

利用するのに容易で快い——またその結果、そのような陶冶（Cultura）を「人類」に開かれた快樂の「樂園」にさせることができるような、その手段の用い方が見出されましょう。<sup>27</sup>

以上、『汎教育』の構造について概観し、『汎教育』の理論、それらの理論を実現する代表的な事物、人間の生涯の各段階、その他の四領域として区分した。「死の学校」については、人間の生涯のあらゆる時期において何時現れても不思議ではないため、他の「学校」と明確に区分されていた。

学校就学期間を終え「意志の教育」が終了した後も、陶冶は継続し、生涯に亘って行われる点は前述した通りである。では、コメニウスが陶冶についてどのように考えていたのであろうか。本稿では次に、「老人期の学校」の前段階であり教育機関を修了して社会で働いている時期について述べられている「壮年期の学校」に注目したい。

### 第三章 「壮年期の学校」における陶冶（Cultura）について

「壮年期の学校」について、コメニウスは自然と月に喩えて以下のように述べている。

それはあらゆる類の果実を集めて、それによって引き続く冬を向かえようと従事している「七月」「八月」「九月」「十月」「十一月」にそっくりの姿をしています。<sup>28</sup>

今の季節に割り振ると盛夏から晩秋あるいは初冬まで、と位置づけられよう。他の「学校」が一ヶ月（「幼児期の学校」のみ二ヶ月）であるのに対し、「壮年期の学校」はそれらと比べて非常に長く、一年の内の五ヶ月もの期間が割り振られている。そして、この壮年期の人間とは「仕事に就くのに相応しい、それまでに準備してきた「生活」様式をすでに実際に開始している人間<sup>29</sup>」であると定義し、壮年期の生活を「活力を維持しているあの（生涯という：著者註）学校の中心的部分であり、この時期の生活こそ学校であるということが極めてぴったりとあてはまる<sup>30</sup>」と述べている。そして、学校就学期間を修了した者は「児童期の学校からであれ、「若者期の学校」からであれ「壮年期の学校」に入るように勧めている<sup>31</sup>。更に「幼児期の学校」から「若者期の学校」までの全ての学校は、「壮年期の学校」に「到達するためのそれぞれの段階に過ぎなかった<sup>32</sup>」という言葉からも、コメニウスが「壮年期」という生涯の時期を重要視していたといえよう。彼は「ここで前進しないことは後退することだと思います。なぜなら、ここには特に、学ばなくてはならない事柄が沢山残っているからです。<sup>33</sup>」と述べている。

『大教授学』等をはじめとしたコメニウスの教育書を補完する書籍として『汎教育』が位置づけられる理由は上述の引用からも明らかであろう。学校就学期間よりも人間の生涯においてはおそらく長いと思われる、就学期間終了後の「壮年期の学校」であるから五ヶ

月間もの長さを比喩として当てただけでなく、「壮年期の学校」での陶冶をコメニウスは重要視した結果、「あらゆる類の果実を集めて」という前述の文章となって表れたと考えられる。そして、「老人期」は（もしもやってきたとしても）悲惨なものではなく、愉快なものとなり、——また、重荷ではなく、勝利の凱歌となるという期待<sup>34</sup>を抱くために、収穫し、蓄えた「知恵」の糧食とかその他の生活必需品<sup>35</sup>や健康等を「壮年期の学校」を過ごす間に用意するようにと論じられている。

しかし、「老人期の学校」のための用意を「壮年期の学校」にしておくことは副産物か、あるいは行為の結果にすぎないと考えられる。なぜなら、前述した通り全ての人間は常に「死の学校」へと突然に進む可能性があるためである。だからこそ「もしもやってきたとしても」という条件がつけられているのであろう。コメニウスは「壮年期の学校」の冒頭で以下のように述べている。

おお、「人間」よ、「生涯」全体に渡<sup>36</sup>って死ぬことを学んでください。またそれ故に、あなたが死ぬときになしておきたかったと思うようになる事柄をなしてください。<sup>36</sup>

その「事柄」をコメニウスは「生活」の「実践」<sup>37</sup>として考え、「壮年期の学校」における重要な陶冶として位置づけた。その目標は学習者自身によって「すべての行為や感情の懸命な管理（取り分け、「慈善」の「実践」）を身に付けさせる<sup>38</sup>」と設定されている。そのためには「どのようにして「知恵」の集められた光を「生活」のすべての仕事に利用したら良いのかということをお教わるべきでしょう。<sup>39</sup>」とコメニウスは述べている。それを達成する手段として神の三書、神と天職（Vocatio）、良い著作家の書の三点が挙げられ、これらを真剣に、即ち実践的にかつ実用に即して用いるとしている<sup>40</sup>。

ここで挙げられている「神の三書」とは精神と地上と聖書であり、『汎教育』においてコメニウスが最も重視した教材であり、事物である。「神の三書」の各々は、第Ⅱ章から第ⅩⅥ章まで一貫して記述されている言葉である。

天職についてコメニウスは「その人自身が自分自身自身や自分の家族にとって「教師」そのものであり、教科書そのものであり、「学校」そのものであるということです。<sup>41</sup>」と述べている。また、篠原は労働について述べた際、語義である Vocatio を取り上げた上で「神に割り当てられた職務（天職）を肢體的に遂行する奉仕の営みである（中略）。職業は各々自己の立場において自己固有の使命を全うする活動であり、その魂は奉仕にあると言へる。<sup>42</sup>」と指摘している。職業を通じての学習であるという点から、天職への従事は職業的陶冶として位置づけられよう。

良い著作家の書としては、歴史書・哲学書・神学書・雄弁術書・詩学書・道德書・工学書等が挙げられている<sup>43</sup>。これら書物は「楽しませてもらうための「輿」ないしは「揺籃」としてではなく、私たちが別のところに推し進めてもらうための車ないしは「船」として、利用<sup>44</sup>してほしいとコメニウスは述べている。篠原は「科学的、藝術的、及び特に道德的に出来得る限り注意を拂ひ、同時に、凡てを全體の有機的な一關節として理解せしめる<sup>45</sup>」陶冶を高専等一般的陶冶としている。そのため、良い著作家の書を通じた学習は高専等一般的陶冶と位置づけられよう。

コメニウスは「壮年期の学校」について、生活が本業であり、生活は労働であると述べるとともに<sup>46</sup>、「知恵を蓄える」時期であるとしている。そして、前述したとおり「神の三書」という生涯を貫く教材が「壮年期の学校」でも取り上げられている。したがって、コメニウスにおける教育機関修了後の陶冶（Cultura）は「神の三書」を紐帯として職業的陶冶と高等な一般的陶冶が一体化されている概念であると考えられるのである。

自らに陶冶を実践しながら過ごす生活は決して容易なものではない。コメニウスもその認識があったからこそ「生活は格闘であり、運命の戯れである<sup>47</sup>」と述べていると推測できる。外部環境に振り回され、それに対して立ち向かうという意味の他に、得てして安易な方向へと流れてしまおうとする自分自身との戦いであるという二重の意味が含まれていると考えられよう。そのため、「あなたは自分の運命の思慮深い製作者の役を演じようとしてください。<sup>48</sup>」と述べ、自らの運命を自身で主体的に切り開くように促していると考えられる。また、陶冶を実践する原動力として、コメニウスは名誉を重視し、それを守るべきであるとしている<sup>49</sup>。コメニウスは以下のように述べている。

取り分け、公衆に役立とうとしている場合には、そうするべきでしょう。（中略）自分の評判を台無しにしてしまえば、それに応じて、他の人々の救いをも台無しにしてしまうことになるからです。<sup>50</sup>

天職に従って生活する人間は自分の行動によって他人に善い影響を与えるであろう。そのため、コメニウスは名声や名誉は自分のために求めるべきではなく、他人のために必要なことであると述べている<sup>51</sup>。自分よりも他人を大切にし、懸命に行動する人間には自ずから名声が付加されていくであろうし、名声によって自分自身に対する名誉は生まれるであろうと考えられえ。したがって、「壮年期の学校」における陶冶を実践する原動力は、聖書に説かれているいわゆる「隣人愛」と考えられる。次章では彼の宗教思想に基づいた陶冶観について取り上げる。

#### 第四章 現世における陶冶（Cultura）の目的とその理由について

コメニウスは人間の陶冶に対する願望として、普遍的な陶冶に向かわせ、内実のある陶冶に向かわせ、また、人間を新しい人間に変えるために「神」の真の模造に真に改造しようとする陶冶に向かわせたいと述べており<sup>52</sup>、それはたとえ困難であっても可能であり、魅力的に容易にさせてくれる原理も存在するとしている<sup>53</sup>。普遍的な陶冶とは、本来神の模像である人間の全てが、真理に則って人間の本性を完成させてくれる事柄のうちの全ての事柄で完璧に陶冶されて神の模造の型通りに仕上げることでであるとコメニウスは述べる<sup>54</sup>。これを要約してコメニウスは以下のように述べている。

人間が「すべて」真の「知恵」によって明るく照らされ、真の「政治」によって秩序という枠に嵌め込まれ、真の「宗教心」によって「神」と一体化して、誰にも「地上」における自己の使命の目的から逸脱し得ないようにさせるということです。<sup>55</sup>

そのためには、必要な事柄について全て知り、最善の事柄を選択したうえでそれを楽しむ、最高善を見出してそれだけと結びつくことによって、永遠の世についてわきまえ、この世でも分別を失うことがないようにすることであると彼は述べている<sup>56</sup>。これらは「私たち人類から愚考を強制的に追放し<sup>57</sup>」、一人ひとりが「幸福な者にさせる事柄の全てを<sup>58</sup>」学び、それを実現する「術を知り、そのための能力を発揮するようになる<sup>59</sup>」ためであるとコメニウスは述べている。したがって、人間一人ひとりの幸福を実現する手段である陶冶について述べた書籍が『汎教育』なのである。そして、これらが完全に実現した暁には、「地上」は「秩序」「光」「平和」に満たされる<sup>60</sup>とコメニウスは述べている。宗教思想を基礎としたうえで、個人の幸福を実現する陶冶と世界平和の達成がコメニウスにとっては分かち難く結びついていることが、以上の点から明らかとなるのである。

しかし、前述した通りコメニウスが望んだ陶冶の実現は容易ではない。その原因としてコメニウスが喝破した根源的な要素は人間の持つ原罪、即ち悪へと誘惑されやすい傾向であったと考えられる。コメニウスは創世記において被造物であり、原罪を犯した神の似姿を持つアダムの子孫として人間を位置づけている<sup>61</sup>。しかし、アダムが犯した原罪は「新しいアダムによって更新された<sup>62</sup>」とコメニウスは述べている。換言すると、原罪は「新しいアダム」即ちキリストによって神から赦されているという立場にコメニウスは立っている。したがって、アダムの子孫である人間は原罪を赦されているが、原罪を犯そうとする気質を継承しているとコメニウスは考えたため、「私たちは墮落を改善しなさい、自分たちのために耕地を開墾しなさい（中略）と命じられているのですし、「才能」の陶冶全体はそのことを目差しているのです。<sup>63</sup>」と論述していると考えられる。

原罪に向かう傾向をアダムより受け継いだ人間であるが、同時に神の似姿として製作されたアダムの特質も彼から受け継いでいるとコメニウスは考えていた。その観点から全世界に存在する老若男女・民族・人種、職業の差異、「障害の有無<sup>64</sup>」に関係なく、文字通り全ての人間に陶冶が必要であると第III章の全篇を通じて述べている。その理由としてコメニウスは、人間の本性を構成するさまざまな事柄という点で、即ちアダムとキリストという系譜に存在し、神の似姿と言う点で同じ形式であり、如何なる人間もやがては死に逝く点で同じ存在であり、地上と言う同じ「学校」で生活し、来世の生命のために準備するように同じ命令を神から受けているという諸共通点で、神は人間の間にどんな区別もしていないと指摘している<sup>65</sup>。また、「人間」のうちでは誰一人として、まったく誰一人として、自分にとってまったく価値のないという者はいないからです。<sup>66</sup>」と述べている。換言すれば、全ての人間は自分の内部に価値が備わっているとコメニウスは述べているといえる。そして、ここにおいてコメニウスは人間一人ひとりには共通の目的とそれぞれに異なった使命が備わっており、陶冶によってそれを引き出そうと意図していたと考えられる。その結果として、前述した「壮年期の学校」において「神の三書」を紐帯とした「職業的陶冶」と「一般的陶冶」という主張が表れたのではないだろうか。

もし陶冶がなされなければ、神から与えられた本性の力を通して人間は容易に悪化し遂には自分自身を滅ぼすことになってしまうので、そうさせないようにすることがどんな場合でも必要であると述べている<sup>67</sup>。また、すべての人間は、さまざまな事柄を正しく知覚したり正しく理解することを教わらなくてはならないとした上で<sup>68</sup>、すべての人間がさま



ざまの事柄の主人であり、自分自身の王であり、自分の創造主の快樂でもある理性的被造物にならなければならない、とコメニウスは述べている<sup>69</sup>。そして、自分自身に対する先生、指導者となるだけでなく、隣人に対しても誠実にするばかりでなく、さまざまな形式によってお互いに啓発しあわなければならない<sup>70</sup>、とコメニウスは指摘している<sup>71</sup>。篠原は「義務の意識に迫られるのでもなく、奉仕しようとの意志すらなく、おのづからにして奉仕となるような奉仕、即ち自然の如くに自由で、且つ人間愛に根ざす奉仕、まとめて愛からの自由奉仕こそは奉仕の極まれるものであり、かやうな奉仕こそは教育の究極理念である<sup>72</sup>」と指摘している。そのような存在になることが実現されれば地上、あるいは現世は以下のように変化するとコメニウスは述べている。

「全地上界」が「神」にとっても、「私たち」にとっても、「さまざまな事柄」にとっても、さまざまな快樂をもたらす庭園となりましょう。<sup>73</sup>

ただし、地上におけるそれはあくまでも未完成であり、真の快樂をもたらす庭園は永遠の世、即ち来世において完成するものであろう、とコメニウスは述べている<sup>74</sup>。次章ではコメニウスの陶冶理想と究極目的について検討したい。

## 第五章 陶冶理想とコメニウスの陶冶 (Cultura) の究極目的について

「死の学校」において汎知学と人間の生涯を重ね合わせるような記述があったことはすでに述べた。汎知学の「界」は1.可能・2.原型・3.天使・4.自然・5.人口・6.道德・7.霊・8.永遠によって構成され、人間の生涯と同様に入れ子構造となっており、「可能と永遠」「原型と霊」「天使と道德」「自然と人工」がそれぞれ対応している。その記述のすぐあとに、上述した入れ子構造の人間の生涯が記されており、次のような対応から明らかになりましょう、とコメニウスは述べている<sup>75</sup>。「死の学校」まで、このような記述は存在していないので、これについてまず考えてみたい。

山田は陶冶理想について「價値意識に訴へて凡ての人が自己の固有なる仕方て人道を表現し得るやうに導くことが、とりもなほさず陶冶の理想である。」と述べた上で、「客觀的價値の統一體としての人道を「大宇宙」(Makrokosmos)と名づけ、調和せる諸價値を身に體せる「人格」を「小宇宙」(Mikrokosmos)と呼ぶことが許されるなら、當爲の發動を解して「大宇宙」の統一と調和とを夫れ夫れに固有なる主觀の統一と調和として顯現すること、これ以外に陶冶の理想は存在しないと云えよう。<sup>76</sup>」と指摘している。山田の述べる「當爲」を、『汎教育』において検討するならば、まさにコメニウスが述べた生涯に亘る陶冶によって神の似姿に近づいていく過程に符合するといえよう。したがって、人間は死によって、人間と「全て」を一致させられるとコメニウスは考えていたといえるであろう。同時に、死を迎えなければ陶冶は完成しないというコメニウスの考えが明らかとなる。これによって「壮年期の学校」の冒頭において記された「死ぬことを学んでください」という彼の訴えが、単に地上の陶冶としての問題ではなく、彼の陶冶の究極目的にも関連させる意図があったと考えられるのである。

コメニウスは、現世を来世に至る過程として捉えており、彼は壮年期の学校において、「生

活は喜劇です。(中略) 現にある「生涯」とは「芝居」なのです。つまり、永遠の世の概観図であり、永遠の世に入っていくための準備なのです。<sup>77)</sup>と述べている。喜劇の内容、即ち人間一人ひとりの生涯に同じものは一つとしてないが、少なくとも何らかのイベントが突発的に起こると考えられる。おそらく、多くは困難ではないだろうか。したがって、登場人物は困難を乗り越えて進まなくてはならないであろう。前述した通り、コメニウスは「前進しないことは後退と同じである」と述べている。この点からもコメニウスの「壮年期の学校」における陶冶は、困難であるからこそ是が非でも達成され続けなければならない問題であったと考えられよう。そして、陶冶は死という幕引きを喜びや笑いをもって終わらせたいという目標に向けて全力で取り組まなければならないことが課題となるであろう。

劇にはもう一点、裏方という役割に徹するスタッフが存在する可能性があり、また、観客から舞台上で見られるという特徴があろう。換言すれば、他者が存在するために他者からの視線があり他者との関わり合いがあるといえるのではないだろうか。したがって、個人のみによってでは生活は完成され得ないであろうし、そのために陶冶もまた完成され得ないと考えられる。声援を送る観客もいれば、罵声を浴びせる観客もいるであろうし、あるいは無関心に眠る観客や、目の前を通り過ぎていく人間も存在するであろう。しかし、コメニウスは「人間であることをやめることはできないのです。<sup>78)</sup>」と述べている。したがって、どんな状況であっても人間は死ぬまで、生き続ける以外ないのである。

『汎教育』において役者に喩えられた「人間」は一人ひとり異なり、劇の内容となる人生もその使命もそれぞれに異なると考えられる点は先に述べた。篠原は「仕事に没入し、仕事の完成に伴ふ幸福感は何ものにも代へがたい悦樂である。<sup>79)</sup>」と述べている。そして、客観的快感へ、即ち価値に向かう活動において障害に打ち勝ちつつ進むところに起こる一種の力の快感と、目的を達成したときに起こる満足の快感へと主観的快感から転移させる必要性を広義の教育における「快樂的価値」を論じた節で述べている<sup>80)</sup>。

以上を踏まえた結果、それぞれの人間がそれぞれの生涯を喜びと笑いをもって終えるためには、陶冶と共に相互の啓発である「隣人との繋がり」によって自らの使命の自覚を日々新たに更新しつつ、「楽しさ」をもって成長し続ける以外にないとコメニウムは考えていたといえよう。そして、陶冶の究極目的と現世の陶冶の目的とが、断絶してはおらず連続した不可分な関係であるという点が明らかとなった。

## おわりに

以上に述べたことを再確認すると次のようになる。第一章では陶冶と教育は異なったものであり、陶冶(Bildung)は一生を通して行われると確認した。第二章では、『汎教育』の構造を取り上げ、その中から「壮年期の学校」を選び、第三章で、そこにおいて論じられた陶冶(Cultura)について検討した。その結果、隣人愛が重要な概念として挙げられたため、第四章においてコメニウスの現世での陶冶の目的について考察した。そして、コメニウスにおける陶冶とは宗教思想を基礎としたうえで、個人の幸福を実現する陶冶と世界平和の達成という個人と世界の密接な関係が明らかとなり、その結果、地上は不完全ではあるが、快樂をもたらす庭園となり得るという彼の思想が確認できた。最後に第五章にお

いて隣人との繋がり「楽しさ」について検討した。その結果、『汎教育』で述べられたコメニウスの見解においては、陶冶の究極目的と現世の陶冶の目的が断絶しているのではなく、連続しており不可分な関係であるという点が明らかとなった。

第一章において18世紀以前の陶冶は「一定の「かた」Bildになぞらへて事物を形成することを指し、外部的に形を與へる意に用ひられてゐた」と確認した。しかし、コメニウスが陶冶を意味する言葉として使用したCulturaは元来「耕す」を意味する農業の言葉である。晩年のコメニウスは、陶冶という語に含まれる外部からの形成という意図のみをもってCulturaを使用してはおらず、人間の本来の姿である神の似姿を内部と外部から呼び起こし、各々自分の使命を自覚しながら堂々と生きていく、樂觀的とも言える陶冶観があったといえよう。ならば、具体的にどのように陶冶することによって「楽しさ」を学習者に伝達するのであろうか。この課題について、今後も引き続き『汎教育』を通じてコメニウスの教育思想を検討したい。

## 註

- <sup>1</sup> 出版は1657年であるが、執筆は1638年頃に終了していたとされる。ラテン語で書かれた『大教授学』は、チェコ語で書かれた『教授学 (Didactica ,1849)』を基に執筆された。この『教授学』は1632年頃に執筆が完了していたとされる。
- <sup>2</sup> 乙訓稔編著『教育の論及』改訂版、東信堂、2008、37頁。
- <sup>3</sup> コメニウスは「母親学校（幼児期に相当する0～6歳が対象。）」、「母国語学校（児童期に相当する7～12歳が対象。）」、「ラテン語学校（青年前期に相当する12～18歳が対象。）」、「大学（青年後期に相当する19～24歳が対象。）」の四つに区分している。
- <sup>4</sup> 上述の四つの学校段階に「誕生前の学校（両親の結婚～子どもの誕生。主として夫婦生活について。）」、「壮年期の学校（上述の学校を卒業した後の生活について。現世の労働に携わる人間が対象。）」、「老人期の学校（現世での労働を終えた人間が対象。）」、「死の学校（以上を踏まえた上での総括。）」が加えられている。
- <sup>5</sup> 『汎教育』第Ⅻ章には「『大教授学』第XXXI章をご覧ください。」という記述がある。Johann Amos Lomenius, *Iohannis Amos Comenii de rerum humanarum emendatione consultatio catholica* (Prag, 1966) Tomus 2 (以下DRHECCと略す。) p.108.
- <sup>6</sup> DRHECC, P.10, 藤田訳ではCulturaを「啓培」と訳しているが、本論では「陶冶」と翻訳する。
- <sup>7</sup> 藤田輝夫『汎教育』75頁。
- <sup>8</sup> ヴィルマン『陶冶論としての教授学』明治図書出版、1973、20頁。
- <sup>9</sup> 篠原助市『理論的教育学』改訂版、協同出版、1949、85頁。
- <sup>10</sup> 同前書、84頁。
- <sup>11</sup> 同前書、85-86頁。
- <sup>12</sup> 同前書、86頁。
- <sup>13</sup> 同前
- <sup>14</sup> 同前書、83頁。

- <sup>15</sup> 同前。
- <sup>16</sup> 藤田輝夫編著『コメニウスの教育思想』法政大学出版、1992、88 頁。
- <sup>17</sup> DRHECC, p.39.
- <sup>18</sup> DRHECC, p.41.
- <sup>19</sup> Ibid.
- <sup>20</sup> Ibid.
- <sup>21</sup> DRHECC, p.13.
- <sup>22</sup> DRHECC, p.129.
- <sup>23</sup> Ibid.
- <sup>24</sup> Ibid.
- <sup>25</sup> Ibid.
- <sup>26</sup> DRHECC, p.130.
- <sup>27</sup> Ibid.
- <sup>28</sup> DRHECC, p.41.
- <sup>29</sup> DRHECC, p.111.
- <sup>30</sup> Ibid.
- <sup>31</sup> Ibid.
- <sup>32</sup> Ibid.
- <sup>33</sup> Ibid.
- <sup>34</sup> DRHECC, p.114.
- <sup>35</sup> Ibid.
- <sup>36</sup> DRHECC, p.111.
- <sup>37</sup> Ibid.
- <sup>38</sup> DRHECC, p.112.
- <sup>39</sup> Ibid.
- <sup>40</sup> Ibid.
- <sup>41</sup> Ibid.
- <sup>42</sup> 前掲書『理論的教育学』99 頁。
- <sup>43</sup> DRHECC, p.113.
- <sup>44</sup> Ibid.
- <sup>45</sup> 前掲書『理論的教育学』96 頁。
- <sup>46</sup> DRHECC, p.114.
- <sup>47</sup> DRHECC, p.116.
- <sup>48</sup> Ibid.
- <sup>49</sup> Ibid.
- <sup>50</sup> Ibid.
- <sup>51</sup> Ibid.
- <sup>52</sup> DRHECC, p.11.
- <sup>53</sup> DRHECC, p.12.

- <sup>54</sup> DRHECC, p.15.
- <sup>55</sup> Ibid.
- <sup>56</sup> Ibid.
- <sup>57</sup> Ibid.
- <sup>58</sup> Ibid.
- <sup>59</sup> Ibid.
- <sup>60</sup> Ibid.
- <sup>61</sup> DRHECC, p.23.
- <sup>62</sup> DRHECC, p.21.
- <sup>63</sup> Ibid.
- <sup>64</sup> 藤田は「この思想遍歴に基づいて障害児教育を正当化したのです。」と述べている。コメニウス著藤田輝夫訳「〈翻訳〉汎教育（ヤン アモス コメニウス）」秋田大学『社会教育学研究』No.2, 1993, 97 頁。
- <sup>65</sup> DRHECC, p.19.
- <sup>66</sup> DRHECC, p.21.
- <sup>67</sup> DRHECC, p.18.
- <sup>68</sup> DRHECC, p.22.
- <sup>69</sup> DRHECC, p.23.
- <sup>70</sup> 本文では「知らない者には教え，誤った者を呼び戻し，罪を犯したものを矯正すること，等々をしなくてはならないということです。」と記されている。
- <sup>71</sup> DRHECC, p.23.
- <sup>72</sup> 前掲書『理論的教育学』101 頁。
- <sup>73</sup> DRHECC, p.22.
- <sup>74</sup> Ibid.
- <sup>75</sup> DRHECC, p.129.
- <sup>76</sup> 山田栄『陶冶理想學』成美堂出版，1936，221 頁。
- <sup>77</sup> DRHECC, p.116.
- <sup>78</sup> DRHECC, p.22.
- <sup>79</sup> 前掲書『理論的教育学』101 頁。
- <sup>80</sup> 前掲書，275-276 頁。

#### 参考文献

- ・井ノ口淳三著『世界図会』ミネルヴァ書房，1988。
- ・乙訓稔著『西洋近代幼児教育思想史』東信堂，2005。
- ・藤田輝夫編著『コメニウスの教育思想』法政大学出版，1992。
- ・堀内守著『コメニウスとその時代』玉川大学出版部，1984。
- ・コメニウス著 藤田輝夫訳「〈翻訳〉ヤン アモス コメニウス 汎教育（続）」秋田大学『社会教育学研究』No.3, 1996。